

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 福村 任生

本論文はイタリアにおける都市・建築の調査研究方法の歴史的展開のなかでいかにして風景・領域史研究が確立したかを跡づけた第一部、ヴェネト地方アゾロを具体的なフィールドとした建築・都市・領域史的研究の成果をまとめた第二部からなる本格的都市建築史研究である。わが国ではイタリア本国における研究動向の一部が紹介されてきたが、その全貌を丁寧に検証したのは本論が最初であり、現在都市史研究のなかでもっとも先端的な視角である領域史研究の実践もまた本論が初の試みであると言ってよい。膨大な文献の解読と地籍史料を中心とした徹底的な空間分析は従来の都市史研究の水準を大きく押し上げることに成功しており、イタリア都市史研究への学術的貢献も高い。

本論は序論、第Ⅰ部二〇世紀イタリア建築学における類型的方法論の展開、第Ⅱ部風景＝領域史の方法論の実践－ヴェネトの丘陵都市アゾロを事例として－、補論アゾロの建築意匠と建物類型、結論からなる。第Ⅰ部は第一章建物類型学の再定義－一九四〇年代サヴェリオ・ムラトーリの初期論考を通して、第二章アイデアとしての都市組織－S・ムラトーリ『ヴェネツィア都市形成史研究』（一九五四年）の再考、第三章建築から風景へ－二〇世紀イタリア都市計画における方法論の模索と展開の三章から構成され、一九四〇年代から一九七〇年代に至るイタリアの都市・建築史研究が風景・領域史へと自律的に展開してゆく過程を追跡している。

第一章では建築類型学（本論では建物類型学という語を用いているが、一般的な用法に従い建築類型学とする）の創始者として知られるムラトーリにあらためて光を当てた論考である。建築類型学はムラトーリの後を継いだ弟子達、いわゆるムラトーリ学派が方法的に深化・拡充させたという評価が一般的であるが、本論ではムラトーリの初期の論考にメスを入れ、都市論以前に「構築された有機体」概念の萌芽がみられ、モダニズムの空間概念の重要性をいち早く発見していたムラトーリの思想が明らかにされた点が重要である。そこから都市論への展開はきわめて自然な流れであったことが了解される。

第二章ではムラトーリの代表作と目されるヴェネツィアの都市形成史研究が

取り上げられる。本論のひとつもハイライトになる部分である。著者は建築類型学の創始者であるにもかかわらずその後の研究史のなかで不当な扱いを受けてきたムラトーリの思考の内部に分け入り、いままで指摘されなかった彼の建築・都市論の独自性・先駆性に高い評価を与える。

第三章は風景論・領域論への展開を跡づけた研究史レビューである。従来都市計画分野のみで語られてきた風景・領域論をさらに広い視野から再検討し、風景・領域への視線を芽生えさせた時代背景や方法的展開を総合的に位置づけることに成功した。

第II部第四章は前3章で辿った風景論・領域史への流れの現時点での研究史上の位置づけを試みた章であり、次章以降の分析の前提をなす部分である。本章のレビューは著者の研究者としての優れた力量を示すに十分であり、都市計画分野のみならず中世史、農業史などの広範な研究への目配りとそれを総括的にまとめる叙述にはきわめて説得力がある。とくに従来ほとんど知られていなかった農業景観の地域研究のレビューの史学史上の功績は大である。また本章において都市史分析の基本資料となる地籍台帳関係の史料批判もきわめて堅実に行われている。

第五章以降は、上記で検討した風景・領域史論への方法的展開を踏まえて、具体的なフィールド（ヴェネト地方アゾロ）の分析へと進む。第五章はアゾロの中心市街地の都市組織論であり、現地調査にもとづく精緻な都市形成分析が微地形や街路形態などと連動しながら説得的に繰り広げられている。

第六章は一八、一九世紀の土地関係史料を駆使したアゾロ郊外の農村景観と土地所有から導かれる社会史を扱った部分であり、その風景分析はきわめて高水準の成果を示している。第一章から丹念に追跡されてきたイタリアの建築・都市・領域分析のすべての蓄積が活かされた章となっている。

補章は全体の論の流れに乗りにくいアゾロの建築の様式史、意匠史がまとめられており、きわめて魅力的な部分ではあるが、本来であれば本部のどこかに位置づけるべき内容であったと思われる。

以上を要するに、本論はイタリア都市史研究の二〇世紀前半から二一世紀にかけての研究展開をはじめて学説史的に位置づけた労作であり、その学説史を踏まえたアゾロ研究の水準は現在の都市史研究のなかでももっとも先端的である。都市史研究への学的貢献はきわめて高く、今後のイタリア都市史研究を格段に押し上げる布石になる好論である。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。

以 上